

「宿業かぎりありて、うくべからん病は、いかなる諸々

ただいまのわが身こそ

の仏、神に祈るとも、それによるまじきことなり。祈る

小林武治さん(七十二歳)

によりて病もやみ、命も、のぶることあらば、だれかは

一人として病み死ぬる人あらん」。小林さんに会って話

もろうたもろうた なにもろた

をしていると、法然上人の『和語灯録』のこの言葉がお

ナンマンドブツの身体もらい

もい出された。脊髄空洞症という難病のため、小林さん

どんな身体かと聞いてみりゃ

の病は確実に進行して、やがて動けなくなる。「こんな

他力の信心得たすがた

不自由な身体にまでなって、この私を、お念仏の世界に

もろうたもろうた なにもろうた

ひきだしてくれました」と。全く回復の道を断たれた身

尊いいのちに人身もらい

をもって、そこをナムアマミダブツの出発点として生き

尊いいのちに人身もらい

ておられる武治さん。念仏を生きる根拠とした人間の

尊い仏法 聞く耳もらい

遅ましさを拝ませてください。

(勝山市・沢町在)

遇わせてもろうた ナンマンドブツ

ウラの仏法はつもりの仏法

つもりの眼で 人さまさばき

ウラの腹立ち あの奴からと

ウラは一番 えらい奴

ウラの仏法はつもりの仏法

つもりとあては はずれるもんじゃ

あてたふんどし はずれるもんや

あてがはずれて ナンマンダブツ

如来の本願遇わせてもらい

如来さまより なにもろた

よび声もろうたそのままと

智慧をもろうてこのままと

この前、何十年ぶりであった人が、私の身体

(小林さんは脊髄空洞症という、原因も治療法も

わからない、十万人に一人という難病。手足のほ

うからだんだん動かなくなる)を見て、こういう

んです。「小林、おまえ、おぞい身体(ひどい身

体)になったなあ」と。そんとき、私の口から、

こういう言葉がでたんです。「これでいいんです。

これでよかったんです」と。そしたら、その人は、

「なんやて!」と、ほんとに怪訝な顔していました。

でもこの身体になったおかげでと、この身体に

素直にうなずけるまでには、ずい分回り道をし

ました。

こんな身体になってから、二十年程たつんで

すが、最初の頃は随分と苦しみ、悩み、医者から絶対なおらない病気と烙印をおされていながら、いろんな宗教をすすめられるままに流転しました。その頃は、病気の苦しみ悩みがさきにたつて、なんとかしてとおもうもんですから、教えをきけば、なにかを信仰すれば、病気もなおり、苦しみも解消するのではないかと一生懸命でした。最後に、ある新興宗教に熱心にさそわれて、一年あまり聞いてきました。この教えをきいていた最後の頃でした。「いま、自分はなにをしようとしているのか」という、そういう問いかけが、はじめてスツと自分におこってきたんです。この新興宗教の教えでは、よい心でよいことをせよ、わ

るいいことをすればわるいむくいがある。善因善果、悪因悪果と教えられたんですね。私はそのとき、自分のこの身体をながめて、「この身体は絶対なおらんといわれて、やがてダルマになつてしもうて、動けんようになるのやが、そのとき自分是一日中、家で寝とる。家内は仕事にいつて帰ってくる。帰ってくる家内に向かつて、このウラの口からなにがでるやろか。動けんようになりやなるほど勝手なもん、でるがんないやろか。そうなったとき、はたして、よい心でよいことができるか。いや、そのときでない、いまの自分はどうや」と自分にたずねてみたんです。それこそ、小松の森ひなさんのおっしゃるように、「わりや、

なんでも言うのとれ」と、たずねたわが身は知らん顔でした。そこで、いま一度、その会の支部長という人に「自分の根性ながめても、どこにもよい心がでてこんが、どうしたもんでしょうか」とたずねたんです。そしたら、「そんなことおもわんと、素直になれ、取越し苦労するな」と叱られました。そやけど、どんだけ叱られても、素直になれんし、取越し苦労はなくならんのですね。

その不審を、機屋の姉さんにたずねたんです。「いま、自分の聴いとる教えは、よいことをすればよい結果があり、わるいことすればわるいむくいがあるという教えやが、どうしてもよい心が出てこんのやが、どうしたもんやろう。自力他

力ということも、ようわからんけど、いいことをして、いいむくい願うておるのやさかい、どうも自力のような感じがするがやけど」と。そしたら機屋の姉さんは、「よい心でよいことをせよというのは、まちがつとるわけじゃない。そやけど、それはあくまでも方便の道や、きつと行きづまりがくるとおもうとつた」という返事やった。私はそのとき、この悩みの世界からでることのできん自分であることを実感としていただきました。そして、どうしたらこの病気がなおるか、と信仰すればこの病気もどうかなるかもしれんと、そんなことばかりおもうとつた自分が、この、いまの悩みをどのように聞かせていただくか、と

いう教えのところに転じさせてもらいました。

自分がどうにかなるんじゃないかと、この己が身ひとつ、自分でどうにもならん、そのどうにもならんウラというものを、聞かせていただくだけやなあ。それを、自分で「振りむきの一念」ともいただいております。

私たらは、ほんとに動かすことのできん自己（わが身）を背にして、尊い人身を受けて生かさせていただいております。そやけどわが身という、たまわつたいのちが根元であることをしらず、私というはからいを中心にして、そして行きづまれば苦しみ悩み、相手を責め相手をさばいて、そして、ウラばかりがなんでこんな目にあわ

んならんと、この「ぼっかり」がでてね。如来さまの光に出遇うて、この身見せてもろうたら、なんのことはない、このままよりほかないわが身やった、それがナンマンダブツということやなあ。あと、ひとつひとつ気づかせてもらいました。そして、家内はじめ、沢山の人に迷惑かけにや生きたら、はじめて自分の後が見えてきました。

北村のおじいさん（北村金次郎さん）の言葉にも、「人間は、聴いてからなろうとする。聴いて覚えてなんとかしよう。ほんとの聞き方はそうじゃない。なつとることを聞け。なつとることを聞きや、文句のない世界、なつとるがやもん」

というのがございましたが、ほんとに「機の深信」

「いまのことわりを聞きひらく」とありますが、ただいまのこのわが身、見せてもらや、そのまま、どうにもならんもんとしてできあがつると、完成しとるんや。蓮如さま、この身を知らしてもらには、「あながちに智慧才覚もいらす」とおっしゃいますわね。ナンマンダブツのいのちを見せってもらうのに、なんの智慧も才覚もいるこっちゃ。「ああ、ここやったなあ」とただかしてもらい、ただかしてもろうた親鸞さまや、蓮如さまの仰せをあおいでいくばかりです。ナンマンダブツがナンマンダブツを聞いて、ナンマンダブツになるがやね。

浄土真宗の教えは、われの努力のいらん世界、

「あら」の世界ですね。「あら」の世界がお浄土、「あら、心得やすの安心や」と。北村のおじいさんもおっしゃった。「お仏壇まいつとると、アミダさん言うてござる。あんた、私を拝んどるけど、私よりまだ尊いもん内にもつとるでないか」とね。ほんまに、そのとおりでした。人間のはからいは、いつもあてにして生きとるんですね。そういう人間のあてとは、無関係のところ、ナンマンダブツのいのちは流れとる、なんの無理もないですね。頑張らんでもいい世界、それがナンマンダブツの世界やわね。

もうやがて、動けんようになる身体です。いま

も、便所の始末してもろうとする自分です。いまでも、やっぱりこの身体がにくいと思います。そやけど、この身体がナンマンダブツのいのちを教えてください。こんな不自由な身体にまでなつて、この私をお念仏の世界にひきだしてくれました。仏法は、「なるほど、ああそうか」とひっくりかえされる。これが要なんです。如来さまは私たちのおもいをひっくりかえしてください。そこがお浄土なんです。要はずした扇ではつかいもんになりませんもんね。いまの自分のすがたが、ナンマンダブツであったと知らされたとき、ほんとにうれしかったですね。

「この身になれたことをよろこべ」と。それは

なんでなれたのかというと、なっていることをきかんとあかんと。なろうとしたら、この世界へは出られんです。なつとるとききや、そのまま八百年前の親鸞さまがここに生きてはたらいてください。いくら気づかしてもろうても迷わにゃおれんわれ、その迷うとるままのわれに気づかしてもらうのが仏のはたらきやったなあと。もしお念仏の世界がなかったなら、人をうらみ、おのれをのろい、どんな道をあゆんでいたとやらと、身の毛のよだつおもいです。

それから十二年間、よき人にたずね、教えをいただいています。なにひとつ変わりもせず、逆にいまでは、聞き顔知り顔が私の求める道を横

切って行ってね。「あわれというも中々おろかなり」と、蓮如上人のお言葉どおりのただいまの私です。

自分というものを、如来さまの光でながめさせてもろうと、ほんとうに「そらごと、たわごと、まことあることなし」と親鸞さまのお言葉をいだけます。ほんに、この身というもんな、どんなものでてくるやら、「さるべき業縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべし」と、そのときそのとき、出てくるものに驚かされています。「親鸞さまは、〈わかりました〉と一度もおっしゃいませんでした。今日も、〈わからない〉と言ってくださっていると思います」と、ジャクリンさん

もおっしゃっておられました。ほんに、なにがでてくるやらわからないけど、でてきた、そのものが宿業でしょう。「いまのことわりを聞きひらく」といわれますが、いまのわれを、どこまでも出発点として、この身にいいきかせて、耳、口、足が用のたつ間は、いよいよこの身を明らかにしていきたいと心に誓っています。

ほんに、こんな広大な世界あったんですね。こんな広大な世界きかせてもらい、お念仏いだかしてもらって、鼻の頭しかめとるような日おくりしとつちや、どうもならんです。